

【生化学13項目検査 詳細説明】

基準値：国立がんセンター中央病院（2019年11月版）より

1	<p>TP 総蛋白</p>	<p>総蛋白は栄養を維持するアルブミンと免疫防御に働くグロブリンを合わせた数値を示しています。 これらは身体の維持に欠かせないタンパク質です。健康な人は総蛋白の値が一定の範囲に収まります。ダイエット、低栄養状態のように、食事制限や食事の摂取量の不足によってアルブミンの原料となる蛋白が不足して作られなくなると、総蛋白は低い値となります。 基準値は、男性女性ともに6.6～8.1 (g/dL) です。</p>
2	<p>ALB アルブミン</p>	<p>アルブミンは減ることはありますが、増えることがないので、高値になることはほとんどありません。低値となる原因として、肝疾患や生成される際に必要な栄養が不足していることが考えられます。アルブミンは正常値内で高いほど良く、正常値を逸脱する低い値ほど良くないと言えます。 この値は前回との比較、推移が重要で、高かった値が急激に低下したという状態は危険な兆候です。 基準値は、男性女性ともに4.1～5.1 (g/dL) です。</p>
3	<p>AST アスパラギン酸 アミノトランスフェラーゼ</p>	<p>肝臓病の有無について調べる時、健診で最も一般的に行なわれる検査です。心筋、肝臓、骨格筋、腎臓などに多く存在し、これらの臓器の細胞に異変が起こると血液中のASTの量が増加します。肝細胞の他、心筋（心臓の筋肉）や骨格筋の病気の指標にもなります。ASTは、ALTより血液中から消失するのに時間がかかるため、しばらく高値が続くという特徴があります。 基準値は、男性女性ともに13～30 (U/L) です。</p>
4	<p>ALT アラニンアミノ トランスフェラーゼ</p>	<p>ALTもASTと同様、肝細胞や心筋、骨格筋の細胞に多く含まれているために、これらの病気の指標になります。ALTは、とくに肝細胞の変性や壊死に鋭敏に反応するので肝臓・胆道系の病気の診断に有効な検査となっています。慢性肝炎や脂肪肝では、ASTよりALTが高値になります。急性肝炎の極期ではASTよりALTが高値となります。 基準値は、男性10～42 (U/L)、女性7～23 (U/L) です。</p>
5	<p>γ-GTP γグルタミルトランス ペプチダーゼ</p>	<p>γ-GTPはアルコールに敏感で、特にアルコールで肝臓が障害されると、ALPやLAPなどのほかの胆道系酵素よりも早く異常値を示すので、アルコール性肝障害の診断に特に重要な検査です。γ-GTPだけが高いときには、アルコールが原因の肝障害か膵臓の病気（膵炎や膵臓がん）を考えます。この場合には数日間禁酒した後、再検査をします。 基準値は、男性13～64 (U/L)、女性9～32 (U/L) です。</p>
6	<p>TG 中性脂肪</p>	<p>中性脂肪は、砂糖などの糖質（炭水化物）、動物性脂肪を主な原料として肝臓でつくられます。血液中の中性脂肪が増えすぎると、動脈硬化の危険が高まります。中性脂肪の測定は、動脈硬化性疾患（狭心症、心筋梗塞、脳卒中など）を予防するために重要です。日本人の場合は、心筋梗塞の人のコレステロール値はそれほど高くなく、中性脂肪が高値を示す例が多いといわれています。 基準値は、男性40～234 (mg/dL)、女性30～117 (mg/dL) です。</p>

7	<p>TC 総コレステロール</p>	<p>増えすぎたコレステロールは、血管の壁に付着し、血管を詰まらせる一因となります。これが脳動脈で起きれば脳梗塞に、心臓の冠状動脈で起きれば心筋梗塞になります。動脈硬化を早める危険因子には、高脂血症、高血圧症、糖尿病、喫煙、ストレスなどさまざまなものがありますが、なかでもコレステロールや中性脂肪が増加する脂質異常症は大きな危険因子です。 基準値は、男性女性ともに142～248 (mg/dL) です。</p>
8	<p>HDL-C 善玉コレステロール</p>	<p>血管内壁にへばりついて動脈硬化を引き起こすコレステロールを引き抜いて、肝臓まで運ぶ働きをしています。このことから「善玉コレステロール」と呼ばれています。値が低いと、動脈硬化が進んで狭心症や心筋梗塞を引き起こしやすくなります。総コレステロール値が高くなくても、HDLコレステロール値が低いと、動脈硬化が進んで狭心症や心筋梗塞を引き起こしやすいことがわかっています。 基準値は、男性38～90 (mg/dL)、女性48～103 (mg/dL) です。</p>
9	<p>LDL-C 悪玉コレステロール</p>	<p>細胞内に取り込まれなかった余剰なコレステロールを血管内に放置し、動脈硬化を引き起こす原因となるため、「悪玉コレステロール」と呼ばれています。実際に動脈硬化を促進するのはLDLコレステロールです。動脈硬化とは、血管の弾力が失われて硬くなり、血管の内側の壁にさまざまな物質が溜まって狭くなり、血液が流れにくくなる状態のことをいいます。 基準値は、男性女性ともに65～165 (mg/dL) です。</p>
10	<p>BUN 尿素窒素</p>	<p>通常、尿素窒素は腎臓でろ過されて尿中へ排出されますが、急性や慢性の腎不全などで腎臓の働きが低下すると、ろ過しきれない分が血液中に残ってしまい、尿素窒素の値が高くなります。尿素窒素の値は、尿素の生成と排泄のバランスで決まりますので、タンパク摂取量、タンパク代謝機能、腎機能の3つの因子が深く関連しています。この値が高値の場合は腎不全が、低値の場合は肝障害、肝不全が疑われます。 基準値は、男性女性ともに8～20 (mg/dL) です。</p>
11	<p>CRE クレアチニン</p>	<p>クレアチニンは、腎臓が正常にはたらいえば、尿として体外に排泄されます。つまり血液中のクレアチニンが多いということは、腎機能が障害されているということになります。クレアチニン値は筋肉量に比例するので、一般に女性より男性のほうが10～20%高値になります。 年齢による変動はほとんどありません。 基準値は、男性0.65～1.07 (mg/dL)、女性0.46～0.79 (mg/dL) です。</p>
12	<p>UA 尿酸</p>	<p>主に痛風の診断をするため、血液中の尿酸値を測定する検査です。尿酸は血液中には尿酸塩となって溶け込んでいますが、腎臓の機能に障害が起こって尿酸が正しく排泄されなかったり、何らかの原因で尿酸がつくられすぎたりすると、たまった尿酸が異常を引き起こし、濃度が一定以上に高くなると結晶化し、足の親指や関節などにたまりやすくなります。これが痛風発作を引き起こします。 基準値は、男性3.7～7.8 (mg/dL)、女性2.6～5.5 (mg/dL) です。</p>
13	<p>HbA1c ヘモグロビンA1c</p>	<p>過去1～2ヶ月の血糖の平均的な状態を知ることができます。検査前の食事や飲酒にほとんど影響を受けません。異常値が出たら1ヶ月以上の間隔をあけて、再検査を行なってください。 基準値は、男性女性ともに4.6～6.2 (NGSP値) (%) です。</p>